

# 兼好の自然観攷

——徒然草研究の基礎的作業(一)——

國 枝 利 久

一

花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは。雨にむかひて月をこひ、たれこめて春の行方しらぬも、なほあはれに情ふかし。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ見所おほけれ。歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「さはる事ありてまからで」などもかけるは、「花を見て」といへるに、おとれる事かは。花の散り月のかたぶくをしたふならひはさる事なれど、ことにかたくななる人ぞ、「この枝かの枝ちにけり。今は見所なし」などはいふめる。

万づの事も、始め終りこそをかしけれ。男女の情も、ひとへに逢ひ見るをばいふものかは。あはでやみにしうさを思ひ、あだなる契をかこち、長き夜をひとりあかし、遠き雲井を思ひやり、浅茅が宿に昔をしのぶこそ、色このむとはいはめ。

望月のくまなきを、千里の外までながめたるよりも、晝近くなりて待ちいでたるが、いと心ぶかう青みたるやうにて、ふかき山の杉の梢に見えたる木のまの影、うちしぐれたるむら雲がくれのほど、またなくあはれなり。椎紫・白樫などの濡れたるやうなる葉の上にきらめきたるこそ、身にしみて、心あらん友もがなと、都恋しう覚ゆれ。

すべて月・花をば、さのみ目にて見るものかは。春は家を立ちさらでも、月の夜は閨のうちながら思へるこそ、いとたのもしうをかしけれ。(中略)兵の軍に出づるは、死にちかきことを知りて、家をもわすれ、身をもわする。世をそむける草の庵には、閑に水石をもてあそびて、是をよそに聞くと思へるはいとはかなし。しづかなる山の奥、無常のかたき、きはひきたらざらんや。その死にのぞめる事、いくさの陣にすゝめるにおなじ。

(徒然草・一三七段)

月並な、春の花・秋の月の見方に対しての反論にはじまる右の一節は、兼好の自然観あるいは美意識を示しているものとしてあまりにも有名である。

ところで、正徹(室町期の歌僧)やその門流の一人・心敬は、完成美とか完全円満なもののみを美の極致とはせず、むしろ不完全なもの、円満具足していないものにも美を見出そうとする兼好のこうした態度や、肉眼よりも心の眼によって深い趣きをとらえようとする態度を、それぞれ次のように絶讃していることもまた周知の通りである。<sup>(a)</sup>

「花は盛りに、月はくまなきをのみ見るものかは」と兼好が書きたるやうなる心根を持ちたる者は、世間に、ただ一人ならでは無き也

(正徹物語・上・七四)<sup>(a)</sup>

兼好法師が云ふ、「月花をば目にてのみ見るものかは。雨の夜思ひあかし、散りしはれたる木陰に来て、過ぎにしかたを思ふこそ」と書き侍る、誠に艶ふかく覚え侍り

(ささめごと・末)<sup>(3)</sup>

また、東常縁も兼好のこうした自然観に共感しているのである。

兼好法師自書に、

月はまどかなるをのみよしといふべからず。雨後の雲間よりあらはれかねたる、又、暁かけていづる月に心すむとかけり。げにもとおぼえて、心はづかしく侍り。

(新古今集聞書)<sup>(4)</sup>

即ち正徹は、「花はさかりに月はくまなきをのみ見るものかは」とする兼好の自然観を、兼好の天稟の資質によって形成された兼好独自のものとして称讃し、心敬は、兼好が「月花をば目にて見るものかは」という境地に到達したことを賞讃しているのである。また、二条派歌人の東常縁も、兼好の自然観に共感しているのである。

ところで、徒然草一三七段にみられる兼好のこうした自然観は、はたして兼好の天稟の資質によって形成された独自のものであろうか。徒然草の古注釈書類を調べてみると、兼好のそうした自然観の片鱗を示す先行作品(例えば和歌)を数例ではあるが指摘・掲出している。例えば、『徒然草文段抄』(寛文七年刊、北村季吟校注)は、桜花の盛りよりも庭に花の散り敷いている風情を詠じた例歌として、次の一首を掲出している。

世の中をおもひつづけてみる時はちこそ花のさかりなりけれ

(壬二集、殷富門院大輔百首の春十五首のうち、藤原家隆)

時雨する雲にかくれている月のあわれを詠じた例歌として、次の一首を指摘してもいる。

村雲のかかれとてしもうばたまの夜わたる月のなどしぐるらむ

(弘長百首・冬月・藤原行家)

また、兼好は、二条派為世門の四天王の一人である。<sup>(5)</sup>とすれば、兼好は、和歌やその他の世界にそうした先蹤を広くさぐり、自らの体験や人生觀と結びつけつつそれらを咀嚼して形成し得たところを、一三七段に端的に表白したの  
ではあるまいか。

そこで本稿では、この問題につき、若干の考察をこころみ、徒然草一三七段研究上の問題点をさぐってみる。

## 二

兼好が徒然草一三七段において指摘している花・月の独自の見方を分類してみると、次のようになる。

㊦ 今にも花の咲きそうな梢の風情

㊧ 落花の散り敷いている庭の風情

㊨ 青味をおびた暁の月が深山の杉の梢のあたりや木の間越しにみえるあわれ。時折、雨を降らす村雲にかくれる

月のあわれ

㊩ 推柴・白檉の葉の上に月光のきらめく風情

㊪ 月・花を目ばかりでみずに心に月・花を思い描く時の情趣

㊫ 花・月を無常觀と關係づけてみようとする態度

なお、兼好は、徒然草四十三段・四十四段においても庭に花の散りしく風情や秋の月の晴れくもるさまの興趣にふれている。<sup>(6)</sup>

そこで、このような花・月の見方、即ち兼好の自然観を示す先蹤―あるいはその片鱗を示す先行作品―さらには、それらに類似した風情・情趣を詠じている作をも含めて―を調査してみる。

## I

まず、八代集の世界および新古今集前後の主要歌人たちの世界を調べ、そうした例歌を次に掲出してみる。<sup>(7)</sup> なお、徒然草の古注にすでに指摘されている例をもその旨を明記して、あわせ掲出する。<sup>(8)</sup>

(A) 桜花が山路や庭に散り敷いている風情や雨中の花の趣きを詠じた作

延喜御時ふちつぼの女御歌合のうたに

あさごとにわがはくやどのははざくら花ちるほどはてもふれて見む

(拾遺・春・よみ人しらず)

山路落花をよめる

さくらばなちみえぬまでちりにけりいかかはすべきしがのやまごえ

(後拾遺・春下・橘成元)

にはにさくらのおほくちりてはべりければよめる

風だにもふきはらずはにはさくらちるとも春のほどはみてまし

兼好の自然観攷

(同・春下・和泉式部)

水上落花といへることをよめる

はなさそふあらしやみねをわたるらんさくらなみよるたにがはのみづ

(金葉・春・源雅兼)

落花滿庭といへることをよめる

けさ見ればよはのあらしにちりはててにはこそはなのさかりなりけれ

(同・春・藤原実能)

水上落花をよめる

みづのおもにちりつむ花をみる時ぞはじめてかぜはうれしかりける

(同・春・藤原成通)

太皇太后宮かものいつきときこえ給ける時、人人まゐりてまりつかうまつりけるに、すずりのはこのふたに雪をいれていだされて侍りけるしきがみにかきつけて侍りける

さくらばなちりしくはをはらはねばきえせぬ雪となりにけるかな

(詞花・春・撰津)

すみあらしたる家のにはに、桜花のひまなくちりつもりて侍りけるをみてよめる

はく人もなきふるさとのにはのおもははなちりてこそみるべかりけれ

(同・春・源俊賴)

落花満庭といふことをよめる

にはもせにつもれる雪とみえながらかをるぞはなのしるしなりける

(同・春・花園左大臣)

落花満山路といへることをよめる

ふめばをしふまではゆかかんかたもなし心づくしの山ざくらかな

(千載・春下・上東門院赤染衛門)

山家落花といへる心をよみ侍りける

花のみなちりてのちぞ山ざとのはらはぬ庭はみるべかりける

(同・春下・源俊実)

花見侍りける人にさそはれて、よみ侍りける

山ざくら花の下かぜ吹きにけり木のもとごとの雪のむらぎえ

(新古今・春下・康資王母)

ひととせ、しのびて大内の花見にまかりて侍りしに、庭にちりて侍りし花を、  
すずりのふたにいれて、摂政  
のもとにつかはし侍りし

けふだにも庭をさかりとうつる花きえずはありとも雪かともみよ

(同・春下・後鳥羽院)

庭落花といふことをよませ給うける

兼好の自然観放

いまはとてちるこそ花のさかりなれ梢も庭もおなじ匂ひに

(続拾遺・春下・龜山院)

ちる花をよめる

(高階楊順『徒然草句解』所引)

ちらさじのもとこのころはわすられてふままくほしき花のにはかな

(貧道集・春)

春十五首のうち

世中をおもひつづけてみる時はちるこそ花のさかりなりけれ

(壬二集・殷富門院大輔百首)

春

(北村季吟『徒然草文段抄』所引)

けふこずは庭にや春ののこらまし梢うつろふ花の下かぜ

(拾遺愚草・重奉和早率百首)

花五十首のうち

ふりきぬる雨もしづくもにはひけり花より花にうつる山道

(拾遺愚草・花月百首)

右に掲げた例歌についての個々の説明は紙数の都合上割愛するが、これら一連の例歌から、すでに平安期より山路



や庭さらには水面に花の散り敷く風情をこよなきものとして詠まれていたこと、また、花が庭に散りしくさまをこそ花の盛りと詠じていたことがわかるのである。

(B) 山家・深山の暁の月のあわれ・深山の木の間にこしあるいは木の間を洩れてくる月の光りのあわれを詠じた作

題しらず

山ふかき松のあらしを身にしめてたれかねざめに月をみるらん

(千載・雑上・藤原家隆)

山家暁霰といへる心をよめる

ましばふくやどのあられに夢さめてあり明がたの月をみるかな

(同・雑上・大江公景)

題しらず

やまふかみたれ又かかるすまひしてま木のはわくる月をみるらん

(同・雑上・法印慈円)

八月十五夜和歌所歌合に、深山月といふ事を

ふかからぬ外山のいほのねざめだにさぞな木のまの月はさびしき

(新古今・秋上・藤原良経)

(南部草寿『徒然草諺解』所引)

おなじ家歌合に、山月の心をよめる

山の端を出でて松の木の間より心づくしの有明の月

(同・雜上・藤原業清)

和歌所歌合に、深山曉月といふことを

夜もすがらひとり深山の槿の葉にくもるもすめる有明の月

(同・雜上・鴨長明)

月歌あまたよみける

このまもる有明の月をながむればさびしさそふるみねのまつ風

(山家集・秋)

月

ながむれば木の間もりくる秋の月風にさがなき杜のしたかげ

(後鳥羽院御集・正治二年第二度御百首)

松間月

ほのぼのと心づくしにもる月をなほ吹きしをる庭の松かぜ

(同・健仁元年九月五十首御会)

こうした作も、千載集の頃から認めることができる。この頃から、すでに和歌の世界に中世的な自然観が形成されつつあったのである。

(C) 兼好の「月はくまなきをのみ見るものかは」という主張に通じる作

顕季卿家にて九月十三夜人月の歌よみけるに

むらくもや月のくまをばのごふらんはれゆくままにてりまさるかな

(金葉・秋・源俊賴)

雲間微月といふ事を

しきしまやたかまど山の雲まより光さしそふゆみはりの月

(新古今・秋上・堀河院)

崇徳院に百首歌たてまつりけるに

秋風にたなびく雲のたえまよりもれいづる月のかげのさやけさ

(同・秋上・藤原顯輔)

題しらず

たぐひなくおぼゆる物は秋のよのうす雲かかるありあけの月

(統詞花・秋上・新院紀伊)

雲間月

夜もすがら絶ま絶まぞまたれける雲より雲にうつる月をば

(頼政集・秋)

月歌あまたよみけるに

兼好の自然観放

なかなかときどきくものかかるこそ月をもてなすかざりなりけれ

(山家集・秋)

(北村季吟『徒然草文段抄』所引)

なかなかにくもと見えてはるよの月はひかりのそふこちする

(同・秋)

雲まのつき

さだめなきくものたえまの月かげはきえて又ふる雪かとぞみる

(二条院讃岐集)

秋二十のうち

たえだえに雲まをわけてゆくつきのゆくへにまよふ秋のむらさめ

(明日香井集・詠百首和歌 建仁二年八月廿五日)

秋

あらしふききりはれあがるやまのはになほほのかなるゆふづくよかな

(同・詠千日影供百首和歌)

月

なかなか一村雨にうき雲は月の光をみなくなりけり

(正治後度百首・宮内卿)

秋二十首（のうち）

いとはじよ月にたなびく浮雲も秋の気色は空にみえけり

（拾遺愚草・二見浦百首）

弘長元年百首歌たてまつりける時、冬月

むら雲のかかれとてしもむばたまの夜わたる月など時雨るらん

（新後拾遺・冬、弘長百首・冬・藤原行家）

（北村季吟『徒然草文段抄』所引）

右に掲げたところからもあきらかな如く、こうした例歌は意外にも多いのである。即ち、源俊賴、藤原頭輔、源頼政、西行、藤原定家、同家隆、同雅経、二条院讃岐、宮内卿その他の歌人たちは、雲のたえ間から一瞬もれてくる月光のさわやかさ、薄雲のかかっている暁方の月や時折時雨にくもる月のあわれさなどを、兼好が「月はくまなきをのみ見るものかは」と主張するはるか以前に詠みあげているのである。

なお、天性寺旧藏現仏教大学図書館蔵『徒然草決談抄』<sup>9)</sup>は、一三七段の参考歌として次の詠を引いている。

村雲は幾重もかれ空にすむ月はくまなきひかりなりけり

聖徳太子

かげりもなく皎々と照りわたる月よりも、村雲のかかる月の情趣に心ひかれるおもいを詠じた作で、問題の参考歌としては適切な例歌である。ただし、『新編国歌大観』その他を検索・調査してみても、この作はみあたらない。注者はいずれの資料からこの「村雲は」の詠を引いたのであろうか。ともあれ、古注釈に引かれている参考歌をめぐる問題も、今後の研究上の課題となろう。

(D) 荻の上葉の上に映じている月の光りを詠じた作

月照寒草といへるころをよめる

もろともに秋をやしのぶ霜がれのをぎのうはばをてらす月かげ

(千載・雜上・紀康宗)

(E) 心に花・月を思い描いて詠じた作

さくらはなのちるを見て

いつのまにちりはてぬらん桜花おもかげにのみ色をみせつつ

(後撰・春下・躬恒)

夜思山花といへるころを

よもすがら花のにほひをおもひやる心やみねにたびねしつらん

(千載・春上・覺性法親王)

あかなくにちりぬる花のおもかげや風にしられぬさくらなるらん

(同・春下・覺盛法師)

題しらず

故郷の花のさかりはすぎぬれどおもかげさらぬ春の空かな

(新古今・春下・大納言経信)

花十首（のうち）

ねにかへるはなとはきけどみる人のこころの中にとまるなりけり

（重家集）

こうした作も、僅少ではあるが、古今歌人によつてはやくも詠まれている。そして、平安末期ともなれば、そうした詠が次第に詠まれるようになり、和歌の世界にも中世的様相をみせはじめるのである。

（F）花・月を無常観と結びつけて詠じた作

題しらず

空蟬の世にもにたるか花さくらさくと見しまにかつちりにけり

（古今・春下・よみ人しらず）

東宮雅院にてさくらの花のみかは水にちりてながれけるを見てよめる

枝よりもあだにちりにし花なればおちても水のあわとこそなれ

（同・春下・すがのの高世）

水上月といへる心をよめる

さもこそはかげとどむべき世ならねどあとなき水にやどる月かな

（千載・雑上・藤原家基）

題不知

兼好の自然観放

よのなををつねなき物とおもはずはいかでか花のちるにたへまし

(同・雑中・寂然法師)

題不知

はかなさを外にもいはじ桜花さきては散りぬあはれ世中

(新古今・春下・藤原実定)

鳥羽殿にて花のちりがたなるを御覽じて、後三条内大臣に給はせける  
をしめどもつねならぬよの花なれば今はこの身を西にもとめむ

(同・雑上・鳥羽院)

題しらず

世中を思へばなべて散る花の我が身をさてもいづちかもせむ

(同・雑上・西行法師)

ちる花をよめる

ものいはぬはなとはきけとさけばちるうきよをたれにとひてしりけん

(貧道集・春)

寄<sub>レ</sub>月述懷 右大臣家会

おちかかる山のは近き月影はいつまでもに我がみなるべき

(頼政集)



じゅつくわいの心を

はるの花さきてはちりぬ秋のつきみちてはわれぬあなうよの中

(殷富門院大輔集)

なお、『徒然草諸抄大成』（浅香山井輯）は、月盈辰ある故に月を賞す例歌として次の詠を引いてはいるが、この詠、勅撰集・私撰集にはみえない。

タレモミヨミツレバヤガテカク月ノイザヨフ空ヤ人ノ世ノ中

右に掲出した如く、以上の例は平安・鎌倉初期の和歌の世界にすでにかなり認められる。ただ兼好は、無常の相において花・月をながめようとしているのに対し、これらの諸例は、花が咲いても散り、満ちた月もすでに欠けてゆくことを常ならぬ世のならいと観じ、花を本来はかないものと観じて無常のおもいをさまざまに抒情し、さらには西方浄土を希願してもいるのである。

しかしながら、無常観を基調として花・月を詠じていることには変りはないのであり、兼好の考え方は、すでに八代集の世界に認められるといえる。

なお参考までに平家歌人―即ち、平経盛・同忠度・同経正らの和歌の世界を調べてみると、その当時の歌壇には、すでに兼好のいう花・月の見方が定着しつつあったにもかかわらずそうした花・月の見方につながる作品は見出しがたい。また、無常観を背景に詠じた花・月の作も認められない。ただし、平経正には次のごとき注目すべき一首がある。

夏月

兼好の自然観放

くまもなきけしきのみかは月かげはあはれもあきにさきだちにけり (皇太后宮亮經正朝臣集)

この一首は、皎々と照りわたる秋の月光のみが美しくあわれであろうか。そうではなくて、夏の月光もまた(秋の月のあわれにさきだつて)あわれぶかいことよ——という意を詠じたものである。兼好は、秋の月をさまざまな状況において、あるいは円満具足していない相において鑑賞しようとしているのに対し、平經正は、夏の月に秋の月同様のあわれをみいだしているのである。和歌の世界では、千載集の頃から春の月が主題として詠みあげられるようになったことともに平經正のこうした自然観には注意すべきであろう。

また、平經盛・忠度・經正らの和歌の世界を調べてみると、もののあわれ的観点に立つて詠まれた作はかなり認められる。それは、經盛・忠度・經正らが平安末期の動乱期を、その一門の興亡をかけて戦い、常に死を覚悟していた武將であつたからであろう。

ともあれ、こうしたところに平家歌人和歌研究上の問題点がある。

## II

次に、枕草子や馬上集その他に、その先蹤をさぐつてみる。

九月二十七日の暁がたまで人とのどかに物語してゐあかしたるに、あるかなきかにほそき月の、山のはよりはつかにみえたるこそいと哀なれ。

(枕草子・一一九段)

(高階楊順『徒然草句解』所引)

月は有明の、東の山ぎはにほそくて出づるほど、いとあはれなり

(枕草子・二五三段)

月のいとあかきおもてにうすき雲、あはれなり

(枕草子・二五五段)

浅香山井輯『徒然草諸抄大成』所引

ところで、兼好は、徒然草において「言ひつづくれば、みな源氏物語・枕草子などにことふりにたれど、同じこと、また今さら言はじともあらず」(十九段)と述べているように、清少納言は、すでに枕草子において、うす雲のかかる月や暁方の山の端にみえる細き月をあわれぶかいものとしている。しかも、徒然草一三九段などは、文体・着想ともに枕草子の三十三段、六十六段、六十七段に倣って書いたものであることはあきらかである。したがって、兼好は徒然草を執筆する以前に枕草子を精読していたことは確かであろう。

藤原俊成も密言抄(馬上集所引)において、徒然草一三七段にみられる兼好の自然観と極めて類似した自然観(月・花の見方)を述べている。

俊成卿の密言抄に書き給ふ也。花はちりての跡を尋ね、この本のさびしきを見て、いかに此の花盛り面白く侍らんと盛りを願ひ、連歌にも其の心を案じ、跡へ心を返してこそ盛もあり又情も残るべきにて候。只花盛りに打ち向かひみん事さのみかん味も有り難し。月も雨の夜曇りがちなる空を待つにつけて、又入りぬる山のみを心にかけ、明けぼのの山を見てこそ面白けれ。うちみれくもりなきに向かひ侍らば、何事かのぞみの心あらん云々

(馬上集・下)<sup>03</sup>

また、徒然草よりも約八十年前にまとめられた十訓抄(建長四年の成立)の著者も、月の夜の村雲だつ空のあわれ

にふれている。

イト物サヒタル家ノスノコノ下ニ、遺水ノ音タエ／＼聞エテオリシモウチ時雨タル空ノ気色、村雲タチテイト哀ナルニ

(十訓抄・卷一ノ一七)

このように、兼好が徒然草一三七段において述べた花・月の見方は、和歌の世界のみならず、枕草子や密言抄・十訓抄などの世界にもすでにみることができる。

### 三

次に、二条派為世門の頼阿・慶運・浄弁そして兼好の和歌の世界に、問題の例歌を捜し、二条派歌人たちの自然観を考えてみる。

(A) 桜花の庭に散りしいてゐる風情を詠じた作

青蓮院入道二品親王家にて 庭前花

うつろふはさくとみしまの花なれば庭の盛も程やなからん

源光政もとにて、落花を

桜花庭のさかりも程なきにちりぬとけふや人につげまし

(草庵集・春下)

(同・春下)

青蓮院宮にまゐりて花見侍りし後、雨のふる日慶運法印もとに申しつかはし侍りし  
雨にこそしをればつともさくら花庭は雪とや降りつもるらん

(同・春下)

又の日かしこまり申入れ侍りしに

庭の面にしばしな消えそ花の雪のためしまれなる跡を残して

(続草庵集・春)

(B) 残花の風情や雨中の花の情趣を詠じた作

太宰権師俊実家に花の歌をよみ侍りしに

のこるとも見えぬ青葉の梢より今もたえだえちるさくらかな

(草庵集・春下)

残花

散りぬとて帰る山路に立つ雲は今たさけるさくらなりけり

(続草庵集・春)

民部卿家百首に、雨中待花

おしなべてよもの木のめも春雨にひとりつれなき山桜かな

兼好の自然観歎

(草庵集・春下)

右京権太夫光吉朝臣山莊花の盛に、人人歌よみ侍りしに、雨中花  
春雨にしをるる花の下露は雪よりおつるしづくとぞみる

(同・春下)

(C) 心に、花を思い描いて詠じた作

侍從中納言和歌所歌人さそひて花見せし時、夜思花  
よるは猶我が身にぞそふくるまで木ずゑにみつる花の面影

(同・春下)

(D) 山家・深山の暁の月のあわれ・深山の木の聞こしあるいは木の間を洩れてくる月の光りのあわれを詠じた作

法印淨弁よませ侍りし三首に、深山月  
木のまもるみ山の月のかげなれやうき世の外の心づくしは

(草庵集・秋上)

月前草花

たえだえに影ぞやどれる露ながら月や木のまを森の下草

(同・秋上)

元盛さそひて住江の中島の月を見侍りし時

思ひ出でばのちも心や住のえの松の木のまのありあけの月

(同・秋下)

彈正親王家五首、曉月

入るかたの嶺の木のまをもる月ぞこころづくしのかぎりなりける

(同・秋下)

松間月

山里のこやの蘆ぶきもる月や軒端のまつの木の間なるらん

(慶運法印集)

遍智院宮よりめされしに、よみてたてまつりし歌

木のまよりしたばのこらずやどるなり露もる山の秋のよの月

(兼好法師自撰家集)

(E) 兼好の「月はくまなきをのみ見るものかは」という主張に通じる作

御子左大納言家四季百首に

ふくる夜のあらしにうすきむら雲はかかれど月の影ぞさやけき

(草庵集・秋下)

雲間月

待出でて見る程もなく村雲のたえまに急ぐ月のかげかな

(統草庵集・秋)

關伽井宮月十首に、霧間月

立ちこめてくれぬる空に秋霧の絶まもみえていづる月かげ

(草庵集・秋上)

雲間月

みればなど心すむらん村雲のひまゆく月はのどけからぬを

(慶運法印集・秋)

(F) 萩の葉の上にきらめく月の光りを詠じた作

八月十五夜に歌読みしに、月前露

露きよき秋の半の萩の葉にひかりことにもやどる月かな

(統草庵集・秋)

花の詠についていえば、頓阿は庭の花の盛りの美しさ、即ち庭に散り敷く花の風情や残花の趣き―たとえば、青葉の梢の間からたえだえにみえる花の風情―などをもさりげなくしかも的確に詠じている。また、雨に濡れる花の風情をも詠じている。さらには、「月・花をばさのみ目にてみるものかは」という兼好の花・月の見方に通じる作をも詠



じているのである。

次に、月の詠についていえば、頼阿は、「月はくまなきをのみ見るものかは」という兼好の主張に通じる作をも詠みあげている。とりわけ、「ふくる夜の」の詠は、薄雲のかかっている月光のさわやかさを詠じた作で、名歌とされている。

秋風にたなびく雲のたえ間よりもれ出づる月のかげのさやけさ

（新古今・秋上・頼輔）

にも劣らぬ秀作といえよう。「立ちこめて」の詠は、霧のたえ間にのぼる月をみて詠じた作である。また、暁の月や深山の木の間越しに見える月光あるいは木の間をもれてくる月光のあわれさを詠みあげてもいる。ただ頼阿は、そうした月光をさまざまにもの思いをさせるものとしてうけとめてはいる。さらに頼阿は露の置いている萩の葉の上にきらめく月光の風情をも詠じている。頼阿は、このように月光の映じる情景をこまやかにあわれぶかくも詠じている。

また、慶運も雲間の月の風情をたしかに詠みあげている。ただし、浄弁の世界には、そうした作はみとめられない。このように、二条派歌人の頼阿は——僅かながらも慶運も——兼好が徒然草一三七段において指摘した花・月の風情・情趣——月並でない風情・情趣を詠みあげている。頼阿の時代ともなれば、徒然草一三七段において兼好の示した花・月の見方は歌人たちの間にもはや定着しつつあり、頼阿もそうした作を詠じたのであろうか。

なお、頼阿は、京極派的な作をも詠みあげている。

春のよの明行くままに山のはのかすみのおくぞ花に成りゆく

夜花

（草庵集・春下）

春のよの月は木のまを出でやらでまづ山のはの花ぞみえ行く

(草庵集・春下)

蓮如宇都宮遠江入道よませし三首、曉花

まち出づる有明の月の影ながらあらはれそむる山ざくらかな

(同・春下)

源大納言家詩歌合 春曉

はつせ山尾上の鐘のこゑのうちに梢の花の色ぞ明けゆく

(同・春下)

妙法院宮月十五首歌合に 島月

わたの原夕霧はれて波まよりみゆるこじまをいづる月かげ

(同・秋下)

これらの詠は、月の出る頃の、あるいは夜の明けゆく頃の情景の微妙な変化を、時間的推移のうちに色彩感ゆたかにとらえた作である。「わたの原」の詠などは、

海路眺望を

波のうへにうつる夕日の影はあれどとほつこじまは色くれにけり

(玉葉・雜上・為兼)

にも劣らぬ作といえよう。

以上の検証からもあきらかなごとく、頼阿の世界は、二条派歌人の立場を固執することなく、広がりを見せているのである。

ところで、徒然草成立の十五年後の貞和元年（もしくは貞和二年）にまとめられた兼好法師自撰家集（前田家尊經閣文庫蔵）を調べてみると、そこには不思議にも兼好自身が徒然草一三七段において指摘した花・月のさまざまな風情・情趣を主題として詠みあげている作はほとんど認められない。<sup>99</sup>

なお、樋口芳麻呂氏は、内閣文庫蔵山家心中集に合綴されている民部卿家褒貶は、民部卿（為定）家の褒貶和歌会から兼好の和歌四十四首を抄出したもので、兼好の六十歳頃の詠であろうと推定していられる。<sup>100</sup>

しかし、この四十四首のなかにも、徒然草一三七段にみられるような自然観に基づいて詠まれた作はみあたらない。また、京都双カ丘西麓の長泉寺に、兼好自筆とする歌書一卷が伝存してはいるが、この集に収録されている五十八首のなかにも、そうした作はみあたらない。そして、こうした事実を、隨筆の世界と和歌の世界との違いという観点からのみで説明することの許されないことはいうまでもあるまい。茲に、徒然草一三七段ならびに二条派歌人研究上の問題点がある。

## 結 語

兼好が徒然草一三七段に披瀝した自然観は、あまりにも有名である。また、その花・月に対する新しい見方を、正徹・心敬・常縁らは賞讃してもいる。しかし、八代集や新古今集前後の歌人たちの世界、さらには枕草子・密言抄・十訓抄などの世界を調べてみると、そうした自然観に基づいて詠まれた和歌やそうした自然観に基づいて叙述された

一節がかなり認められたのである。

いうまでもなく自然美のイメージは、歴史の流れの中で徐々にではあるが変容してゆくものである。例えば当初は、花といえば盛りの桜花であり、月といえば皎々と澄みわたる秋の月であった。しかしそうした概念がひとまず定着するようになると、今度はそのような既成概念を超えて、花を詠む場合も、庭上花、雨中花、残花、月を詠む場合も深山の曉月、雲間月、萩上月というふうに歌題を拡張、またはさまざまな情景をこまやかに設定するようになり、あるいは新しい情趣やあわれを追求するようになるのである。そして平安末期頃にはいかにも清らかでこまやかな、あわれにも美しい自然美のイメージが形成されたのである。しかもそこには、無常観の投影している場合も認められるのである。

それ故に、前掲の調査例（花・月のさまざまな風情・情趣を詠みあげた例歌やそうした叙述の一節）も、以上のような自然美の形成過程と関連づけてまず把握・理會すべきであろう。

ところで兼好は、花・月に対する新しい見方を示しているこれら先行作品（前掲）を集約し、中世を生きた兼好自身の体験と明晰な人生観とに結びつけてこれらを咀嚼した上で、徒然草一三七段に兼好の独自の自然観として披瀝したのである。即ち、徒然草にその自然観を披瀝するまでに兼好自身の長い道程のあったことを確認すべきであろう。なお、平家歌人たちの和歌の世界には、そうした作はほとんど認められない。死を常に覚悟しているべき武人でもあった平家歌人たちは、すぐに散る花である故にひとときのその盛りを賞し、曇るよりは皎々と澄みわたる月を愛したのである。

また、二条派為世門の四天王の歌人——頼阿・慶連・淨弁・兼好の和歌の世界を調べてみると、頼阿にはそうした

例歌がかなり認められたのである。他の二条派歌人に比べて、その歌境や詠風は広がりを見せている。

さらに、兼好の和歌の世界を調べてみると、そうした例歌はほとんど見出しがたい。徒然草一三七段にみせたあの情熱は、兼好の和歌の世界には認めがたいのである。兼好は、随筆の世界には、そうした自然観を吐露はしたものの、和歌の世界では、そうしたおもいは心の内に深く蔵し、花・月の本意を淡々と詠みあげることにとどまったのであるうか。

しかし、花・月の本意を淡々とよみあげた作にも味わいぶかい秀作が認められる。

⑦雲のいろにわかれもゆくかあふさかのせきちの花のあけぼののそら

(兼好法師自撰家集)

①月やどるつゆのたまくらゆめさめておくての山田あきかぜぞふく

(同)

⑦の詠は、逢坂山の曙の光りに染まる紅の雲と桜花とを時間的推移の下、色彩感ゆたかにとらえた作である。また①の詠は、月が露にきよらかに宿る夜、晩稲の山田に吹く秋風のあわれを淡々と詠みあげた作である。

また、次の作などはいかにも新古今的妖艶美につながる作である。

⑨年もへぬさてやはつせの山風にわかれしままのみねのしら雲

(内閣文庫蔵民部卿褒貶所収)

⑤夜のほどはたちやそひけんよこ雲の花にわかるるあけぼののそら

(長泉寺藏・兼好歌書所収)

⑦の詠は「うかりける人をはつせの山おろしよはげしかれとは祈らぬものを」(千載・恋二・俊頼)や「としもへぬいのるちぎりやはつせ山尾上の鐘のよその夕暮」(新古今・恋二・定家)を、⑧の詠は「春の夜の夢のうきはしとだえして峰に別るる横雲の空」(新古今・春上・定家)をそれぞれ本歌としており、艶なる面影が余情となって纏綿している作である。こうしたところに、徒然草の場合とはまた別な兼好の魅力があろう。

ともあれ、兼好の自然観の解明にあたつては、古今集以後の自然観の解明や兼好の資質とその環境についての緻密な考察が要請されよう。これらの解明・考察については、なお次の稿でこころみたい。

注

- (1) たとえば安良岡康作氏『徒然草全注釈下』参照。
- (2) 『歌論集能楽論集』(日本古典文学大系)所収の本文に拠った。
- (3) 『連歌論集』(日本古典文学大系)所収の本文に拠った。
- (4) 幽齋本『新古今聞書』の「おほあらきの」の詠の注参照。荒木尚氏編『幽齋本新古今聞書』の本文に拠った。
- (5) 随分の歌仙にて頼阿・慶運・静(浄)弁、兼好とて其比四天(王)にて有りし也(正徹物語・七四)。
- (6) 「春の暮つたか、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、奥ふかく、木立ものふりて、庭に散りしをれたる花、見過ぐしがたきを」(四十三段)

「心のままに茂れる秋の野らは、置きあまる露に埋もれて、虫の音かごとがましく、遣水の音のどやかなり。都の空よりは雲の往来も速き心地して、月の晴れ曇る事さだめがたし。」(四十四段)

- (7) 勅撰集・私撰集・私家集等の作品は、原則として新編国歌大観本の本文に拠った。ただし作者名は、まま次の如くあらためた。

例・摂政太政大臣↓藤原良経

なお、時間の関係で私撰集・私家集の全てについて精査することはできなかった。次の機会に、遺漏の点は補うこととする。

- (8) 古注に引かれている例歌は、『徒然草諸抄大成』、『徒然草解釈大成』に拠って確かめた。

- (9) 題簽が一部分損失しているので文談抄か決談抄か判読しがたい。無刊記。いずれ本学図書館報『常照』に紹介の予定。
- (10) 平家歌人研究の諸問題については谷山茂氏『平家の歌人たち』（角川書店刊）を参照。
- (11) 柳原紀光筆本一一九段の書入の本文に拠る。なお、『枕草子』（日本古典文学大系）の三四六頁の補注一〇〇を参照。
- (12) 続群書類続（十七輯下）所収の本文に拠った。なお、『国書総目録』には「密言抄」という書は掲出されていない。他の文庫目録類にもみえない。
- (13) 宮内庁書陵部蔵片仮名本（古典文庫所収）の本文に拠った。
- (14) 十訓抄と徒然草との関係については、白石大二氏『兼好法師論』（三省堂刊）の第三部第二節をも参照。
- (15) 兼好法師自撰家集および同集収録各歌の詠歌年次については、井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 南北朝期』・同氏『兼好家集』（『徒然草講座』第一巻所収）をも参照。
- (16) 樋口芳麻呂氏「内閣文庫蔵山家心中集について―西行・兼好の一和歌資料として―」（『中世文学』6号所収）参照。
- (17) 私家集大成本や新編国歌大観本の底本となった前田家尊経閣文庫蔵の兼好法師自撰家集や兼好の勅撰集入集歌と長泉寺蔵兼好歌集との間には、一首の一致歌もみあたらない。また、堀部正二氏は「兼好法師自撰家集」（『書誌学』第14巻5号所収）において、前田家尊経閣蔵兼好法師自撰家集には二ヶ所の脱葉のあることを指摘していられる。しかし、長泉寺本ではその五十八首を春、夏、秋、冬、恋というふうに部類、排列していて、その脱葉を補なう部類とは考えがたい。兼好の自筆歌集かどうかは今後慎重に検討してみたい。なお高橋貞一氏『兼好自筆の歌集一卷』（『国語・国文』23号所収）をも参照。
- (18) 八代集の自然観については谷山茂氏『古今集・新古今集の自然観』（『国文学』九巻九号所収）参照。
- (19) ただし、石田吉貞氏は、『中世草庵の文学』（河出書房刊）において、「頼阿の艶は妖艶に近づかうとし、兼好の艶は哀艶に向はうとしてゐる」（第三、草庵の文学）というふうに、頼阿・兼好の庶幾するところの相違を指摘していられる。

